

目次

4	金澤翔子です
8	まえがき——あの日の月明かりの下で
11	第一章 第一回建長寺書展（平成21年5月3日～6日）
33	第二章 第二回建長寺書展（平成22年5月2日～5日）
51	第三章 第三回建長寺書展（平成23年5月2日～5日）
71	第四章 第四回建長寺書展（平成24年5月3日～6日）
85	第五章 第五回建長寺書展（平成25年5月3日～6日）
99	第六章 第六回建長寺書展（平成26年5月3日～6日）
122	あとがき

かなざわ・しょうこ



書家。1985年、東京生まれ。5歳の時より母・泰子に師事し書道始める。20歳で銀座書廊にて初の個展を開催。その後、建長寺、建仁寺、東大寺、中尊寺などで個展を開催。厳島神社などで奉納揮毫。2012年のNHK大河ドラマ「平清盛」の題字を揮毫。2013年に国体開会式で巨大文字を揮毫、紺綬褒章受章、天皇御製を謹書。著書に『小さき花』（小学館）、『翔子』（角川マガジンス）、『お母様大好き』（いきいき株式会社）などがある。

まえがき——あの日の月明かりの下で 金澤泰子

「母」として翔子を産んだ私は、生まれてきた娘がダウン症だということを知らされた瞬間から、闇の中に突き落とされた気持ちでした。しかし不思議と、当の本人である翔子は笑顔を絶やすことはありませんでした。そして私を闇に落としたと思っていた娘は、やがて鎌倉五山第一位の名刹・建長寺で個展を開いていただけの書家になりました——。

それは、まだ小さな個展を数回開いた頃のことでした。パンフレットを作る際、我が娘ながら見事に書いた「法華」の文字が気に入って、表紙に使ったのです。そしてそれを友人に差し上げたところから、少しずつ歯車が動き始めました。友人がお茶の席にパンフレットを持っていったところ、偶然その場にいらつしゃった建長寺の吉田正道管長が「これは一体誰の字だろうか?」「素晴らしい字だ。建長寺で個展を開いていただこう」とおっしゃったのです。ある冬の日のことだったでしょうか。

当然、私は社交辞令だと思いました。とてもうれしいお言葉でしたが、にわかには信じられなかったからです。しかし実際にお話が進み、ゴールデンウィークに第一回の建長寺

書展が開かれる運びとなり、以後、毎年ゴールデンウィークには個展を開かせていただいています。

20代の若い書家がお寺で……しかも建長寺のような歴史のある名刹で……。第一回を開くための打ち合わせの帰り道、夜空を見上げると、そこには私を照らす月が浮かんでいました。人目がなければ、その月にひれ伏したいほどの感謝の気持ちが押し寄せてきたことを、今でもはつきりと思い出せます。「ありがとう」という言葉だけが、何度も何度も心の中に浮かんできました。

絶望の闇の中、月の光が差すようにゆつくりと訪れた幸せ……。かつては隠れるように生きてきた私に、あの日、確かに光が差したのです。

娘・翔子の歩みに何かを感じていただければ、私たち親子にとって、それ以上の喜びはありません。



第一章 第一回 建長寺書展

sample





天地玄黄

(縦 145cm × 横 74cm × 4)